

[電力総連関西電力労組木曾川支部・新田 貴久]

今回のボランティアは2度目の参加ということで前回七ヶ浜に行った際は、細かな物を拾う作業でありかなり復興しているのだと思っていましたが、今回南三陸町の方に行きましたが全然復興が進んでいなくビックリしました。

復興への道のりは、まだまだ時間がかかるのだと改めて実感しました。

今回で、震災から2年が経ちメディアでも放送されなくなってきていますが、震災があったことを忘れずに周りの人にも今の現状を伝えて少しでもボランティアに参加してもらえるように声をかけをしていきたいと思っています。

最後に、今後もお役に何かお役にたてるのが、積極的に参加したいと思います。

ボランティアに参加されたかた方々本当にお疲れ様でした。

[電力総連関西電力労組木曾川支部・田淵 貴久]

私は今回南三陸町の復興支援ボランティアに参加して、被害の大きさと復興が停滞していることに驚かされました。

今回は80人程で作業を行い、山のように埋まっている物を回収することができましたが、全体から見るとごく僅かであるなと感じました。またボランティアを受け入れることができない場合もあるそうで、二年経った今でも復興の体制が整わないほど被害が大きかったと感じました。

また今回は被害に遭われた方からお話しを伺うことができました。普段は忘れてしまっている人の命の大切さを改めて感じました。そして私にとって南三陸町のことが他人事ではなくなりました。

最後に、ボランティアを通じて南三陸町の復興にほんの僅かでも貢献できてよかったと思います。

[電力総連関西電力労組木曾川支部・岡崎 和樹]

初めて被災地のボランティアに参加させていただきました。

地震発生から丸2年が経過し、メディアもあまり被災地の状況を伝えなくなっていたこともあり、復興は順調に進んでいるものと思っていましたが、活動地点である南三陸町で目にした光景は衝撃的でした。

今回の作業は人力による瓦礫の撤去でしたが、掘起こされたもののなかには自分の子供の年齢に近い子が遊ぶようなおもちゃやぬいぐるみ等が出てきて、これで遊んでいた子供たちはどうなったかと思うと胸が痛みました。

この三日間で現地の状況を被災地の方々にお聞きできたこと、微力ではありましたが少しでも被災地の復興に貢献できたことは、自分にとっては大きな財産になったと思います。ありがとうございました。

自分のできることをやり続けたい！

[電力総連関西電力労組木曾川支部・土岐 誠]

今回2回目となった復興支援ボランティアであるが、訪れた南三陸町志津川は震災後2年が過ぎたのに、復興とは程遠い状態であった。大きな瓦礫の撤去は終わっていたが、基礎のみ残された建物跡は、ここに町並があったとはどうしても想像できないほどの荒涼とした寂しさがあった。

ここでのボランティア内容は、瓦礫の撤去作業であったが、この2年間全く手の入っていない場所での作業のためか、土の中から出てきたものは、柱、梁、壁などの家の材料に混じって、ぬいぐるみ、

ズボン、布団、メガネなど生活感溢れるものばかりであり、津波の来る前まで、ここに人の生活があったことを思い知らされ、悲しくなってきた。

様々なものを見聞きし、いろいろなことを考えた今回のボランティアであったが、語り部の芳賀さん、連合宮城塩釜地協の小田島さん、七ヶ浜の引地さんの「実際に被災を体験したものでないと伝えられない話」は、心に突き刺さり、震災当時の状況が、生々しく伝わってきた。

これから、被災地の復興にはどれだけの時間が掛かるか分からないが、被災地を忘れず、自分のできることをやり続けたい。そして、現地では出会った人たちが皆言われていた「来てくれることがありがたい。」との言葉を胸に、生涯、被災地と寄り添いたい。

[農団労上伊那労組・清水 博人]

あの東日本大震災の当時信じられないテレビの映像を見て、被災地の皆様の為に同じ日本人として被災地に出向いて出来る事をしたい気持ちに満ちていた当時、募金に協力はしましたが、復興の力になりたいと思いながら、二年の歳月が流れました。

そんな時、今回連合長野のボランティアツアー募集があり、職場の仲間の理解を頂き参加させて頂きました。

宮城県南三陸町の現地では、瓦礫の除去と分別の作業でした。

現場では、土砂に紛れ多量の住宅廃材に紛れ、オモチャや衣類、生活の面影がある物もあり、持ち主の方は大丈夫だったのか心配しながら作業をしました。

顔が潰れてしまったキューピーのぬいぐるみが、ポロット出て来たときは、なんとも言えない切なさが胸に込み上げてきました。

1日半の作業で、バケツ約20杯瓦礫を除去しましたが、土砂の体積では2000も出来ず、心残りがありましたが、「少しでも被災地の復旧に役立った！」と、心に言い聞かせ現場を後にしました。

何人かの被災した皆様の話を聞く機会があり、実際にお話しをお聞きすると、その内容は深く、心に染みしました。

実際に、私たちは、災害前と後を比べる事は出来ないのです、やはり、被災者の本当の気持ちは、計り知れなく感じられました。そんな中でも特に「被災者である私たちを忘れないで欲しい」との声は、切実でした。

今後も、復興に向けた取り組みは続けられると思いますが、今回、実際に見聞きした事を、多くの方に伝えて、この大震災を風化させない事が、今回ボランティアの参加した私の出来る事であり、義務と感じています。

[連海上伊那地域協議会・埋橋 典子]

飯田市出発「連合長野復興支援ボランティア」が昨年11月に企画された時に「参加したい」という気持ちがあった。ただ、瓦礫撤去となると「私でお役に立つだろうか？」と不安になり前回は二の足を踏む結果となった。

しかし、地協事務所の駐車場で拾って頂けるなんて、私にとってこんなに好都合なことはない。毎回「どうしよう」と心に引っかかったままでいるよりも、震災から2年となる節目に参加しようと決めた。

3月9日飯田を0時30分に出発したバスは、上伊那を1時25分に出発し、その後みどり湖P A・松本合庁・松代・佐久でそれぞれ参加者を乗せ南三陸町へ向かった。

正午過ぎにやっと南三陸町ボランティアセンターに到着。活動内容は「瓦礫撤去作業」ということで現地へ移動。向かった先はボランティアセンターからはバスで数分のところだった。バスから降りて川沿いの土手を上流に歩く。振り返ると遠くの平地には、ぽつん…ぽつんと骨組みだけの建物が見える。小道の脇に山積みされた壊れた漁船の横を通り、強風で砂塵が巻き上がる場所に出た。山の裾野にあたる高台には、下から見上げると家が数件建っているのが見える。

ボランティアリーダーの「ハッタ」さんの回りを参加者が囲むようにして集まった。ハッタさんは「自分も皆さんと同じボランティアという立場です。」とお話しされていたが、後で知った話では、自家用車に寝泊まりされて活動日は500日に上る方だという。

「ここは南三陸町志津川地区の上の山と言う所です。皆さんにはこれから、ここに埋まっている瓦礫を取り除いていただきます。」

掘り出した瓦礫の分け方、善意で集まった道具を大切にしたいこと、そしてもし地震が起きたらどうするか等の説明を受けた。

「この山の途中まで木が切られて切り株になっていますが、あそこが津波の到達点です。あれより上に逃げて下さい。」資料によれば志津川地区の津波の高さは16メートルだ。

それぞれスコップやツルハシ、バケツなどを手にして、1日目の作業に取りかかった。

翌日は6時半に仙台の宿泊先を出発。途中、旧南三陸町防災対策庁舎前で参加者全員が黙祷を捧げた。2日目は今回で最終便となる長電観光のボランティアバスと合流し、前日と同じ場所で瓦礫の撤去作業を行った。

砂や小石の混ざり合った土の中から、沢山のガラス片や木片が出てくる。分別しながら掘っていると、「これ回収しても良いですか？」と掘り出したものを集めて回る人がいる。大きな柱が現れると、まわりの皆で掘り進め、力のある人が長いバールでテコ入れしてくれる。自然に全員が助け合い協力し合っている。

太い梁が出てきた。庭木も横倒しのまま埋まっていた。カーペットやフェンスが掘り出された。この下に家が丸ごと埋まっているんだ。2年前からずっと。

ボランティアを経験された方が「生活そのものが埋まっている」と話されるがその通りだと思う。帰りの車中、「小さいお子さんの椅子が出てきた。」「クレヨンが出てきた…」という話を聞く。私もブラウスや靴下などの衣類、カセットテープなどを掘り出した。カセットテープには“西田幸子”とマジックで書かれていた。

2日目の作業終了時刻となり、掘り出したものの山がいくつも出来上がった。しかし、この割り当て範囲の中だけでも、この山の何倍もの大切なものが埋まっているのだろう。

3日目。3月11日慰霊の日。

バスで仙台市・名取市・多賀城市を回りながら七ヶ浜町へ向かい、七ヶ浜町の菖蒲田浜で慰霊式に参加。車中では連合宮城塩釜地協の小田島事務局長から震災当時のお話を伺った。小田島事務局長は宮城交通（私鉄総連）出身でバスの運転手さんをされていた方だ。

2年前の3月11日は海に隣接する広場で春闘の決起集会が開催される予定だった。その準備中にあの大地震が襲ったのだという。

車窓から見える家が密集していたという地域は、一階部分が激しく壊れたまま残されている家が散見されるだけで、広々と平地が続いている。名取市閑上の日和山という小さな丘の前でバスが止まった。そこには掲示板があって、震災前の賑やかな町の写真が貼られていた。全員で丘の上まで行って見渡すと、何もない平地がどこまでも広がっていた。

「なんだか震災の後涙もろくなりましてね。」小田島さんは何でもないようなことでも泣けてくると話された。震災の話をするのは辛いことだろう。初日に行った仮設の“さんさん商店街”でお話しして下さった芳賀タエ子さん、菖蒲田浜での慰霊式の後、セヶ浜町を回りながらお話しして下さった、引地淑子さん。皆さん辛くても繰り返し話して下さるのは、故郷の復興を願ってのことだと思う。

2年経ってあの震災の記憶は薄れつつあると思う。

ボランティアに参加する前、「私なんかお役にたてるのだろうか？」とっていたが、参加して気づいたことは、自分の気持ちがまた2年前に戻ったということだ。ボランティアに参加して良かった。

この経験を与えていただいた全ての方に感謝いたします。

[自治労長野県職員労組諏訪支部・高木 保夫]



「私たちは生かされている。連合長野第15次復興支援ボランティアに参加。南三陸町上の山地区、ツルハシ・スコップで二日間の作業。生活の品々、食器が次々と。その中に昭和39年東京五輪の記念硬貨あり。被災地からも、次期五輪へエールか。参加者40名の半数近くが女性に、新労働運動の曙光も見た」

参加しての感想を、ツイッターとフェイスブックに掲載したものです。連合のネットワークを活かした足腰のつよい、息の長い復興支援ボランティアに感謝します。

[自治労長野県職員労組・高木 栄子]

家族も申込みができるということで、主人と参加させて頂きました。テレビや新聞で見るより、自分の目で見て、現地のお話を聞いて、この災害のことを忘れないため参加を決めました。

ボランティア作業では、主人と二人で少しずつ土を掘っては、中に埋まっていたお皿の破片や衣類、窓ガラスや木の破片を取り出して分別をしました。

見渡す限り、家の基礎部分しかない状況でした。災害前まではここに生活があったのに、すべて無くしてしまわれたのだと呆然となりました。ガレキではなく、「生活そのもの」だったのです。

セヶ浜町の慰霊式では社協の引地淑子さんが、「長野から多くの勇気と元気をもらった。今度は観光に来て」と話されました。家族で再訪したいと思いました。

連合長野の成沢部長さん、長電観光の津金添乗員さんに大変お世話になりました。貴重な機会をありがとうございました。

[全労金長野県労働金庫労組・戸井田 直人]

東日本大震災から2年が経過し、以前は頻繁であった被災地の状況についての報道も徐々に少なくなってきました。被災地の状況を主にテレビや新聞といったメディアを通じてしか知ることのなかった私にとって、震災から2年後で少し遅いのではないかと思います。初めてのボランティア参加でした。

現地でおこなったボランティア作業としては南三陸町の津波被害地の地面を掘り起こして出てくる様々な瓦礫を片付けるといったもので、体力的には何とかこなせるものでした。

作業そのもの以上に、地面を掘り起こして出てくる「瓦礫」と呼ばれる様々なものが、あまりに生

活感のあるもの（陶器の皿・衣類・ぬいぐるみ・ファイルなど…）であったことが心に刺さりました。今まで、自分が津波被害というものについて、報道を中心とした情報によって頭で理解したとだけ、実際にどんなことが起きたのかということに、本当の意味での想像力が及んでいなかったことを恥ずかしく思いました。

今後も様々なかたちでの復興支援活動があると思いますが、今回感じたことを忘れずに支援活動に参加していきたいと思っています。

ボランティアをなぜやめるのか

〔自治労松本市職員労組・安藤 伸〕

なぜ、15次隊でボランティア活動をやめてしまうのか、意味がわからない。まだ、災害から2年しかたっていないが復興が続く中で活動をやめてしまうのはおかしいと思う。今回初めて参加して、素晴らしい活動を続けてきたことが理解できた。ではなぜやめてしまうのか。今回40人の募集がすぐに一杯になったと聞いた。まだまだ参加する人は大勢いると思う。自分もまた参加したいと思った。この活動は5年、10年と続けていくべきだと思う。

〔自治労松本市職員労組・小野 良太〕

私は、ボランティアという経験が初めてで、震災以来何か出来ないか？と考えるものの、具体的に被災地を訪れることがないという中での参加でした。被災地を見ておきたいという気持ちもありましたが、そもそもボランティアというものの自体に懐疑的な自分もあり、そんな自分が実際に現場を見たら何を感じるだろうかという点も知りたかったのです。

ボランティア作業は、二日間南三陸町での瓦礫撤去作業でした。地道にあらゆるものを掘り出す作業は、終わりの見えない作業に思えました。何の脈絡もなく、生活用品、船の網、おもちゃなどが出てくると、津波の理不尽な酷さを感じ、何とも言えない気持ちになりました。

たった3日間被災地へボランティアに行き、被災者の気持ちを全て理解することなんて出来ませんし、それで理解したというのは、高慢でしょう。地元に戻ったら、直接何かをすることは難しいかもしれせん。そんな中でも、地元の方々のお話や、体験談をお聞きする中で強く感じたことは、皆さんは大きな地震・津波に、家や家族、友人を奪われても、地元を愛して、地域のつながりを大切にし、前へ進んでいるということです。

私自身、被災した方々に出来ることは微力だと思います。しかし、被災地の皆さんの様に、家族・友人・職場等普段ある当たり前のつながりをもっと大切にして生きていこうと思いました。

心に残る経験になりました。ありがとうございました。

復興支援ボランティアに参加して ～もう2年、まだ2年～

〔自治労松本市職員労組・原 智之〕

東日本大震災からちょうど2年となる、平成25年3月9日～11日にかけて、連合長野主催の復興支援ボランティアに初めて参加し、南三陸町で土砂・瓦礫撤去の作業を行いました。

震災は、自分ではもう2年前の出来事と思っていましたが、実際に現地に行ってみると、未だに地震・津波被害の爪痕が生々しく残っておりました。

特に、今回訪れた南三陸町は被害が大きかった場所であることから、震災直後から、防災庁舎をはじめとした被災状況をマスコミの多くが報道し、町の様々な映像を見ることができた場所であり、最

近の報道では、復旧が進んでいるように見えました。しかし、今回の作業現場となった南三陸町上ノ山地区は、多くの土砂と瓦礫が、かつて人々が生活していた場所に、未だに厚く覆いかぶさっており、とても2年もの歳月が過ぎた場所のように見え、まだまだやらなければならないことが多くありました。当然、この2年の間に、多くの人々が復旧・復興に向け尽力をしていたであろうことを考えると、改めて震災のすさまじさを痛感させられました。

中でも、津波被害は想像を絶するものだったと感じさせられました。ボランティア作業で撤去した土砂には、建築資材や船舶の一部、さらに、時計や洋服、おもちゃなど、実に様々な生活用品が混ざっており、津波が、そこに暮らしていた人々の生活をそのまま飲み込んだことが窺えました。

このような状況を見ると、被災地では、復興以前に、復旧がまだ行われていないのだと感じ、震災からもう2年が過ぎていると考えた自分が、震災を他人事にしつつあると感じました。

また、ボランティア活動とあわせて、現地の方々のお話しも伺ったのですが、マスコミを通しては決して知ることのできない震災時の状況と、今後の復興に向けた熱い思いが伝わってきました。

さらに、被災された方々にとっては、震災からまだ2年ですが、その間に、被災地に関係のない、多くの人から震災の記憶が風化していくことを危惧されていたのが印象的でした。

被災地は、復興に向けた長い道のりが始まったばかりなので、今後も自分ができることは協力していきたいと改めて思うとともに、復興に向け、現地で日々頑張っている方々がいることを忘れてしまわないようにしようと思います。

最後になりますが、今回のツアーを企画・実行していただいた連合長野及び、長電観光旅行センター、一緒に作業をしていただいた参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

[自治労松本市職員労組・鶴田 克也]

私は、東日本大震災が起こった2010年度より、松本市職員労働組合にて専従をしています。震災直後の2011年度より書記長となりました。

震災後、連合ボランティアがすぐに発足し、市職の組合員さんの参加の手続き等をしてきましたが、自分自身は業務に追われ、今まで参加できずにいましたが、この15次でやっと参加できました。

南三陸町の津波の被害の後の何も無い一面の荒地を、テレビではなく自分の目で見たときには、正直、だいぶ復興が進んでいるのかと思いました。ボランティア作業をしてみて、この何も無い荒地の下はまだまだ、土砂と瓦礫が堆積していることになり、ほとんど進んでいない状況だと思いました。初めてあった仲間同士協力して、自分のできることを何とかやりたいという思いでやってきましたが、あの作業を人力だけで、それもボランティアだけでやっていていつ終わるのか、重機をいれて効率よくできないものかとも思いました。

今回のボランティアに参加でき、良い体験ができたのは、現地で被災された方々に、それも自分たちがその場所で作業をした後でお話しを聞くことができたことではないかと思います。組合の集会等で被災された方々のお話しは、何度も聞かせていただきました。テレビでも被災地の様子を見てきました。情報だけは事前に入っていました、自分でその現場に立ち、現場の被害の大きさを目の当たりにし、そして生の声を聴くこと。とても貴重な体験をさせていただいたと思います。

芳賀さんが話しされていた、「人の思い出をガレキと呼ぶなんて・・・」という思いがとても重く心に残り、2日目の作業はガレキではなく思い出や生活を少しでも感じながら、その物たちの供養の思いも込め作業をさせていただきました。

各地のボランティアセンターが閉鎖され大きな受け入れ先がないことを聞き、本当にある程度の復

興が進み、ボランティアではなく地域の皆さんで支えあい復興が進んでいるのであればそれに越したことはないと思います。ただ、南三陸町や七ヶ浜、荒浜など見させていただいた限り、復興に必要な手はまだまだ必要なのではないかと思います。

自分自身何ができるかわかりませんが、何かできることがあるはずだと感じています。直接的なボランティアを含め、まだまだ自分にできることを考えて、係っていきたいと思います。

本当に貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

[自治労松本市職員労組・川窪 茂]

復興支援ボランティアに参加したいと願い、今回やっと参加することができました。

一昨年の3. 11は自分自身としても他人事ではありませんでした。

地震の一週間後に息子の結婚式を予定。お嫁さんは福島県の郡山。結局、結婚式は11月まで延期になりました。

それからずっとボランティアに行きたい、行かなければと思っていましたが諸事情で今回になりましたが、連合長野さんの呼びかけが目に入り早速申し込みました。

この3日間は自分にとって毎日が衝撃的でもあり、今まで映像でしか理解していなかった震災内容が無知だったなーと強く感じました。

やっぱり現地に来てみないとわからないというのが実感でした。

瓦礫の撤去が主体でありましたが、少し掘っただけでも次から次と太い木材、金物、衣服、ビニール類……と複雑に絡み合った状態で。

とても人力で掘り起こすことは大変だなーと。でも回りを見ると普段はあまり縁がないツルハシ、スコップを一生懸命使った瓦礫撤去をしている女性。とてもたのもしく見えました。このような姿を見ると更に力も出てきました。

平均年齢は39歳とのこと。だいぶ自分が平均年齢を引き上げたと思います。

一生懸命掘った後を振り返るとわずかな面積。震災から2年が経過していても、まだまだ復興にはほど遠い状況です。

バスの中から見えた津波の跡。今は更地になって遠くまで見通しよくなっていますが、コンクリートの基礎部分のみ残り所々に花が添えられていました。津波さえなかったら幸せな家族、住み慣れた町だっただろうなーと心が痛みました。

今回の貴重な体験を早速、家族・職場に報告しました。

これからも今回の経験を継承し、できる限りのボランティア活動を継続していきたいと思います。連合長野さん、長電観光さん、そして目的を共有した仲間の皆さん、大変ありがとうございました。

[自治労松本市職員労組・藤牧 功子]

平成25年3月9日～11日まで、南三陸町でのボランティア活動に参加させていただきました。私にとっては2回目の参加となりますが、今回はボランティア活動だけでなく、被災された方からのお話を伺うことができ、非常に貴重な時間を過ごすことができました。こういった機会を設けていただいたことにまず感謝を申し上げたいと思います。

前回、参加させていただいた時は、七ヶ浜町にて、田んぼに入った細かいガラスなどを拾う作業で、大きな作業ではないものの、人手のいる作業でした。一見するときれいになっている田んぼでもこのような作業が必要であり、田植えにはまだまだ時間がかかることが予測され、見た目だけではわから

ないこと、そして元に戻るまでの道のりの遠さを感じました。そのため、今回活動させていただいた南三陸町が、震災から2年を経過してもなお、大きな作業が必要であることに非常に驚きました。

また、被災された方のお話しの中でも、仮設住宅から出られるのはいつになるのかわからないとの話もあり、さまざまな意味で、復興にはほど遠いということを感じました。

報道等の中では、被災した自治体では職員が足りず、他の自治体から応援職員をお願いしているとのことでしたが、それでも手が追いついていないことが報じられていました。そういったことが、被災された方の生活に強く影響していると感じ、自治体職員としてまた個人として何ができるのかを考えさせられた3日間でした。

最後に、参加された皆様のおかげで、楽しくボランティア活動を行なうことができました。ありがとうございました。またいつかお会いできる日を楽しみにしています。

[自治労松本市職員労組・山崎 裕美]

今回初めてボランティアに参加させていただきました。

作業をした南三陸町は、震災から2年が経過したとはとても思えないほど、時間が止まったままであると強く衝撃を受けました。住宅があったであろう場所の土を掘ると、木材や瓦やガラスなどが大量に出てきました。生活をしていた物が出てくると、やはり胸がしめつけられる思いがしました。

また現地の方のお話しには新聞やテレビでは知ることができない生の声を聞くことができました。思い出すのもつらいことを語っていただいたことを感謝しております。

今回参加させていただいて一番強く感じたことは、現地へ行ってみないとわからないということです。今後も何らかの形で携わっていきたいと思いました。

[電力総連東京電力労組松本総支部・阪下 多賀子]

今回で、2回目の連合ボランティアへ参加させていただきました。

活動場所は、2回とも宮城県南三陸町。

前回から5ヶ月経過後の現地の復興がどのくらい進んでいるのかを確認したいと思う気持ちでも、ボランティアに参加させてもらいましたが、現地の復興はまだまだと思われました。

3日目は震災から2年目の3月11日で、震災当時の生々しい話しを聞いたり、慰霊の集いに参加させていただき、また良い経験が出来たと思いました。

また機会があれば参加したいと思います、支援物資を購入するなどでも復興の手助けが出来ればと思います。

[電力総連東京電力労組松本総支部・阪下 多賀子]

今回で、2回目の連合ボランティアへ参加させていただきました。

活動場所は、2回とも宮城県南三陸町。

前回から5ヶ月経過後の現地の復興がどのくらい進んでいるのかを確認したいと思う気持ちでも、ボランティアに参加させてもらいましたが、現地の復興はまだまだと思われました。

3日目は震災から2年目の3月11日で、震災当時の生々しい話しを聞いたり、慰霊の集いに参加させていただき、また良い経験が出来たと思いました。

また機会があれば参加したいと思います、支援物資を購入するなどでも復興の手助けが出来ればと思います。

[全労金長野県労働金庫労組・魚住 友紀]

南三陸町での作業は、今回2回目です。5ヶ月ぶりでしたが、景色は前とあまり変わっていませんでした。確実に復興に向かっていていると思いますが、場所によって復興スピードが違います。

今回の作業は、1日目と2日目、土に埋まっている、機械では拾えないガレキの撤去作業を行いました。

ガレキは、そこに住んでいた方の大切な思い出です。生活用品、家の壁、車のナンバー、子どものおもちゃなどが出てきました。震災後そのまま、手付かずの所もまだまだあり、掘れば掘るほど出てきます。

作業は、必ずボランティアセンターに行って、その日の作業が振り分けられます。他のボランティアセンターは、運営が厳しく、縮小したり、閉鎖していています。

辺りを見渡すと、まだまだやらなきゃいけない事が、たくさんあるのに、どうなるのだろうと不安になります。

メディアでも、あまりとりあげられなくなってしまい、被災地の状況がわかりません。このまま忘れられてしまうのではないかと感じます。

3日目、連合塩釜地協の小田島事務局長より、大震災当時のお話を聞きました。あまりに激しい揺れで、コピー機やプリンターが飛んでいたそうです。机の下にいたら、自分も死んでいただろうと、おっしゃっていました。

地震がおさまり、家に戻った友人は、津波にのまれてしまいました。結婚して子供もできて、これからだっのに・・・と涙をうかべて話をして下さいました。

当時、地震で信号機が故障して、すごい渋滞になり多くの方が津波に流されてしまった。自分は助かったけど、震災後、食料も水もなくて、寒さとたたかい、一日一日を生きるのが精一杯だった。町が戻っていくのは、嬉しいけど、なんだか忘れられていく気がする。

今も警察は、行方不明の方を探しているけど、見つからない。でもご家族のために、探すことをやめる事はできないと、お聞きしました。

今でも仮設住宅に住んでいる方が多くいらっしゃいます。窮屈でつらい暮らしを送っています。この震災で、多くの方が犠牲になってしまった事。今も苦しみながら、頑張っている人がいるという事。絶対に忘れてはいけません。

作業の時、リーダーの方が、「この町は、必ずよみがえります」とおっしゃっていました。震災後は、まだまだおわっていません。でも必ず元に戻ります。

その為、微力ですが自分にできる事を考えて続けていきたいです。



[全労金長野県労働金庫労組・中村 憲央]

今回、初めて復興ボランティアに参加しました。震災から2年が経過した今、自身の目で被災地の現状を目の当たりにしました。

南三陸町でのガレキ撤去を行ないましたが、掘っても掘っても出てくるガレキ。それが生活感が生々しく、2年経っても復興とは程遠い現状にとっても衝撃を受けました。また他の参加者の皆様から

ボランティアや被災地に対する想いを交換できる場もあり、私自身の考え方・意識も変わり貴重な経験となりました。

さまざまな支援がまだまだ必要であり、今後も積極的に被災地と繋がっていきたいと思いました。

[全労金長野県労働金庫労組・塚原 和郎]

この度は連合長野復興支援ボランティアに参加させていただき感謝申し上げます。

今回参加するにあたり震災が徐々に風化している事が気がかりでありました。実際は震災の復興はまだまだ行う事は山程ある中、特にマスメディアでの取り扱いが少なくなってきており実際の被災地を見ながら自分の感覚が間違っていないか確認の意味での参加でありました。

実際自分の目で見ると被災地は復興にはかなりの時間を要する状況であり、なんとなく震災が風化している現状を何とかしなければとの思いが確信に変わりました。しかしながら一人の力で出来る事は限られており今回自分自身で見て、感じた事を多くの人に伝える事が今すぐ出来る事なので多くの組合員に伝えて行きたいと思っております。

今回の復興支援のボランティアで一番印象に残った事は連合宮城の小田島事務局長のお話でした。実際自分の目で見ると震災の状況はかなりのインパクトがあり心に残るお話でありました。震災当日の状況、震災当日以降の市民生活、友人の死に対する思いなど震災を経験した人でなければ話せない内容であり私自身忘れてはいけないと思っております。

今回大変貴重な体験をさせていただきました。その経験を是非多くの人にさせていただきたいと感じております。多くの人が体験する事が震災復興に繋がっていくと信じており、自分自身も今回の経験を基に震災復興に少しでも寄与できるよう行動していきます。

[自治労長野市職員労組・水野 辰也]

人々の生活の塊を、重機もなく手作業のみで掘り起こして、果たして何かの役に立っているのか…。この作業が何かに活かされるのか…はっきり目標が持てないままに、汗を流した二日間でした。

でも、連合さん長電さんのおかげで、現地をこの目で見ることができたし、話も聞けました。映像で知っているのとは雲泥の差があると思います。

身体は疲れているのに、妙に清々しい気分です翌日出勤する私がいまいました。ありがとうございました。

[電力総連中部電力労組長野総支部・森川 弘]

まずもって、このボランティアを計画してくださった連合長野と長野電鉄の関係者の皆様に心から感謝したい。そして、今回のボランティアを理解し、一緒に参加してくれた妻と友人にも感謝したい。

本ボランティアに8月の七ヶ浜町と今回の南三陸町と2回目の参加となったが、畑の土に紛れている手のひらサイズに満たない小さな木片やガラスのかけらを拾う七ヶ浜町の作業を経験している私は、ここ南三陸町の現場に案内され東日本大震災の復興スピード・進捗は、地域によって大きな違いがあることを実感し唖然とした。

なぜなら、南三陸町では、家や車などの大きな物は片付けられ、遠目からでは一見片付いているかのように見えるが、地面を掘り返すと七ヶ浜町の現場とはまったく異なり、正に3月11日の津波に襲われる直前までの生活を強く感じる品々が、土の中で折り重なり絡み合った状態で埋まっている状況を目の当たりにして、大きなショックを受けるとともに、復旧スピードの違いを強く感じ、あらためて地震による津波がこの町に、宮城県に、そして東日本にあたえた被害の大きさ強さを思い知らさ

れた。

また、今回のボランティアでは被害にあわれた方が「語り部」として震災当時のお話をされ、さんさん商店街ではガイドサークルの汐風の方、バス内では塩釜地協の小田島事務局長さんと七ヶ浜社協の引地さんから、壮絶な津波との戦いや家族・仲間・友人の死など、私なら思い出したくない辛く悲しい実体験を目をうるませながら私たちに語ってくださり、私も目頭が熱くなり、胸が苦しくなった。

そして、旧南三陸防災庁舎前での黙祷、七ヶ浜での慰霊祭、3.11地震発生時間のサービスエリアでの黙祷は、私の人生で決して忘れられない出来事である。

終わりに、私は七ヶ浜町と南三陸町での活動で、数多くの貴重な経験を通じて人の優しさと強さ、そしてボランティアの思いと絆を実感した。今度は私が東日本大震災の甚大な被害を会社・地域・友人など、自分の身近な人達に伝える「語り部」となり、被災地の復旧と復興の現状を伝えたい。

そして、今後も被災地支援の継続に協力し、次回は家族でお手伝いに参加したい。

[電力総連中部電力労組長野総支部・大関 和夫]

南三陸町の駐車場から現地の景色を眺めて、元はこんなに遠くが見通せるような所では無かったはず。家があり、人が行き来し、暖かい話し声が聞こえ、子供たちの遊ぶ姿が見られた、ごく普通の街がそこにはあつたはず。それが今は何もない見渡す限りの荒地となってしまった。津波の脅威を改めて凄いと感じました。

この震災で亡くなった方、被災された方のことを想うと心が痛いです。私だけでなく多くの皆さんがそう感じていると思います。この思いを心に刻みいつまでも忘れることがないように生活をしていきたいと思います。戻れるものなら普通の生活に戻りたいと誰もが願っていると思いますが現実違います。私がこうして普段の何気ない生活を送れることは大変幸せな事だと思います。この想いを忘れずこれからの人生を送っていききたいと思います。

[電力総連中部電力労組・滝澤 孝]

3.11、あの災害が発生してから二年の歳月が過ぎました。この間「私に出来ることは何だろう？」と思いつつも、具体的な行動に出ないままでしたが、「ボランティア募集」のチラシによりやが背中を押される形で参加することが出来ました。

私は、「南三陸」という地名をメディア等で耳にすることはありましたが、東北のどこにあるのかさえ知りませんでした。参加することになってからは、あまりにも知らない自分に気づき、あわてて下調べをした次第です。やはり、「現地に行く」ということは、それだけでも「被災地と向き合う」きっかけとなり、さらに支援に対して自らが前向きになるということだと感じました。

現地で実際に活動してみると、被災地、被災者のことを何も知らない、理解していないという現実、さらに復興支援の現状とさまざまな課題を突きつけられたように思います。

語り部 芳賀タエ子さんのお話が印象に残りました。「ガレキ」という言葉に心を痛めている。「ガレキ」ではなく、それは（形は変わってしまったが）「自分たちの財産」であるということ。一緒に逃げたはずの親族が犠牲となり、生かされた者が背負うどうしようもない辛さ。被災者どうしが再会した場面では、本人の無事を確認するのみで（家族のことなど）それ以上の被災状況は尋ねることができない。なぜなら、身内を失った悲劇をお互いに打ち明けることになってしまうから…。そして、災害に遭わないこと。まずは自分の命を大切に、周りを助ける「共助」につなげるということ。普段からの防災・減災に対する備えの大切さも教えられました。

三日目は、小田島事務局長より被災地の案内をして頂きました。さすがに元バスの運転手さんだけに、被災前の町の状況をよくご存じで、さらに案内のルート選定が素晴らしく、きめ細かく説明して頂きました。短時間ではありましたが、ご本人の体験や、当時の悲惨な光景についてのお話もあって、非常に内容の濃いものでした。

最後のプログラムは、七ヶ浜での慰霊の集いでした。「ここが、二年前に津波に襲われた場所？」と、現在の美しい海岸の景色を見る限り、ここが被災地だとは思えず、地元被災者とボランティアたちの懸命な作業があったのだと想像し、頭が下がりました。

今回のボランティアに参加し、私はたくさんのものでることが出来ました。防災の重要性、ボランティアとはどういうことか、被災地・被災者とともに歩く「共生」ということ、家族・地域の絆。これらを、私たちのために時間を割き、自らの悲惨な体験を通じ、伝えて頂いた被災地の皆さまに対し、改めて感謝を申し上げます。加えて、今後とも被災地支援と防災に対して前向きに取り組んでいきたいと思えます。

二回目のボランティアを終えて

[電力総連東京電力労組松本総支部・増井 香織]

初日、前回同様南三陸町でのボランティアで、少しは作業内容も変わったかと思ったが町の状況は全く進行しておらずむしろ前より大きな物が出てきたのがショックだった。

2日目は100人近くの方が作業場所に入っても可燃ゴミは大型土のうが30袋足らず分しか片付けられず非常にもどかしい思いをした。しかし誰が作業中にリーダーシップをとるまでもなく助け合って作業を進めていけるのがすごく良かった。

3日目には七ヶ浜町の案内をしてくださった引地さんがもともと住んでいた場所にはもう住めないと仰っていて、その事項が知らされた時の気持ちを察すると何も言えなくなる。

それでも七ヶ浜町に住み続けると明るくおっしゃっていたので私たちはそういう人たちを忘れないようにしなければいけないと思った。

[全労金長野県労働金庫労組・小坂 諒子]

私自身ボランティアに参加することが初めての体験で、なにが自分に出来るのだろうと不安な気持ちでしたが、実際の被災地はどうなっているのかをしっかりと目で見て、感じてこようと思い今回のボランティアに参加しました。

私たちが作業をした数時間では、きれいになるはずがなく・・・まだまだ復興には時間がかかると感じました。ボランティア活動は徐々に縮小していますが、震災の事実を忘れることなく、自分が出発することをしたいと思います。

三日間ありがとうございました。

[全労金長野県労働金庫労組・宮澤 利枝]

第15次復興支援ボランティアに参加できて良かったというのが今の率直な思いです。

東日本大震災から早2年、震災直後は地域や職場などでも復興支援の取り組みが多くなされ、できる限りの支援はさせて頂いていたつもりでした。月日が経つにつれその機会も少なくなり、私自身の震災に対する意識も薄くなっていたと改めて実感する機会となりました。

実際に被災地となったその場所で見えた光景や空気から感じるもの、被災された方々の生の声をお聞

きすることができたことは、メディアを通じて得た情報だけではわからないものを体感するものでした。私達が普通に生活出来ていることがどんなに幸せな事なのかと改めて考えさせられました。

いつも一緒に居て当たり前の人がいなくなり、身の回りのものは全て流され、日常生活で当たり前に出ていたことができないという状況は、実際に経験した人にしか本当の辛さや悲しさはわからないのだろうと思います。この辛い出来事は決して他人事ではなく、誰にでも起こり得ることであり、東日本大震災を忘れないことが一番大切なことであると感じました。

[農団労佐久浅間労組・木内 毅]

被災地は復興からは程遠く、支援の在り方を根本的に考える必要があるのでは。それが南三陸町のボランティアに参加して考えたこと。

国は何をしているのか。せつかく復興庁があるのだから地元と資金を有効に使い、物理的ばかりでなく、精神的なケアや生活を支える在り方があるのでは。それによってボランティアも多様な必要性も生まれるのでは。うまく話せないのももどかしい。

今後も非力だが復興に役立てるよう個人としても行動してゆきたい。



3日目に視察した
名取市関上地区の
津波被害前後の写
真
(2001年9月撮影と
2011年3月27日撮
影)

第16次復興支援ボランティア

派遣期間	2013年 5月10日(金)～12日(日)				
派遣場所	宮城県南三陸町	派遣人数	40名	長電全体	※貸切

《参加者氏名》

	班	氏名	所属組織名		班	氏名	所属組織名		
1	1	高松 勝仁	自治労飯田市社会福祉協議会職員労組	21	3	福澤 茜	JAM甲信タカノ労組		
2		今村 真悟		22		池田 香			
3		宮澤 憲二	電力総連中部電力労組	23		柄澤 裕美	自治労県職労諏訪支部		
4		下山 裕美	基幹労連IHIターボ労組	24		古田 和之	自治労松本市職員労組		
5		中川 友子		25		川窪 茂			
6		水野 徹		26		石井 佑樹			
7		班	平 次朗	基幹労連IHIエアロマニファクチャリング労組		27	班	原 忠博	電機長野日本電気労組
8			増澤 好文			28		宇田 寛	自治労県職労長野支部
9			川手 正博			29		黒鳥 光則	自治労県立病院機構労組
10			有賀 栄治			30		羽尾 昭一	農団労ながの農協労組
11	2	井口 渉	自治労県職労諏訪支部	31	4	矢崎 泰子	連合諏訪地協事務局		
12		新田 貴久	電力総連関西電力労組木曾川支部	32		秋山 直美	UAゼンセン片倉機器労組		
13		小川 元気		33		国島 健矢	電力総連東京電力労組松本総支部		
14		杉本 雄平		34		良川 孝行			
15		藤澤 秀司		35		後藤 利博			
16		岡崎 和樹		36		上村 了一			
17		水上 清志	電力環境総合テクノ労組	37		近藤 有美	自治労県職労本庁支部		
18		班	野知里 彩	基幹労連IHIターボ労組		38	班	片岡 雅也	自治労立科町職員労組
19		石川 加茂	39			西尾 浩明	電力総連東京電力労組		
20		増田 充康	40			成沢 勇次	連合長野事務局		

《3日間のスケジュール》

5月10日(金) 晴れ

- 0:30 キラヤ伊賀良店を出発
- 1:25 上伊那地協事務所前を出発
- 2:20 みどり湖PAを出発
- 2:50 松本合同庁舎前バス停を出発
- 3:50 長野電鉄旧松代駅を出発
- 4:45 佐久乃おぎのやを出発
- 12:40 南三陸町ボランティアセンター(VC)到着
- 13:00 田尻畑地区で農地の石拾い作業
- 15:00 作業終了しVCへ戻る
- 15:20 VCを出発
- 15:30 さんさん商店街の南三陸町観光協会にて『ガイドサークル汐風』の語り部・芳賀タエ子さん(兄弟を津波で亡くされる)より、震災当時の話しをスライドも交えてお聞きする
- 17:00 さんさん商店街を出発





19:00 ホテルパールシティ仙台へ到着

19:30 団結会

5月11日(土) 曇り時々雨

6:55 ホテル出発

旧南三陸町防災対策庁舎前で黙禱

8:40 南三陸町VC到着

9:00 田尻畑地区で農地の石拾い作業



12:00 VC戻り昼食と休憩

13:00 農地石拾い作業



15:00 作業終了しVCを出発

15:30 ヤマウチ海産物店で買物

さんさん商店街で買物

16:40 さんさん商店街を出発

18:40 ホテルへ到着、班毎に夕食交流会

5月12日(日) 曇り

6:40 ホテル出発

8:15 南三陸町VC到着

9:00 3カ所の漁港に分散してメカブ削ぎ作業

(1・2班-志津川漁港、3班-袖山漁港、4班-荒砥漁港)



12:10 VCを出発

18:50 佐久乃おぎのやへ到着

19:45 長野電鉄旧松代駅へ到着

20:30 松本合同庁舎前バス停へ到着

20:50 みどり湖PAへ到着

21:30 上伊那地協事務所前へ到着

22:30 キラヤ伊賀良店へ到着